



| | |
|--------------|--|
| Title | 仮名漢字変換の自動化に関する研究 |
| Author(s) | 牧野, 寛 |
| Citation | 大阪大学, 1980, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/32490 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|-------------|---|
| 氏 名・(本籍) | ^{まき} 牧 ^の 野 ^{ひろし} 寛 |
| 学 位 の 種 類 | 工 学 博 士 |
| 学 位 記 番 号 | 第 4 9 7 5 号 |
| 学位授与の日付 | 昭 和 55 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 5 条第 2 項該当 |
| 学 位 論 文 題 目 | 仮名漢字変換の自動化に関する研究 |
| 論 文 審 査 委 員 | (主査) 教 授 木 沢 誠 (副査) 教 授 田 中 幸 吉 教 授 嵩 忠 雄 教 授 都 倉 信 樹 教 授 藤 沢 俊 男 教 授 高 島 堅 助 |

論 文 内 容 の 要 旨

通常の日本語文の表記形態である漢字仮名混り文を計算機で処理する際の最大の難点は漢字の入力実行の方法にあり、容易な漢字の入力を行い得る方法として、表音表記した仮名文を漢字仮名混り文に変換する。いわゆる仮名漢字変換による方式が考えられる。

本論文では、仮名漢字変換の自動化における未解決の二つの問題、すなわち自動分かち書きおよび同音異義語の選択の問題に対し、新しい手法を提案し、人手による分かち書きを要しない、いわゆるべた書き仮名文から漢字仮名混り文への自動変換を実行するシステムの試作について述べたものである。

べた書き文の自動分かち書きを実現するために、二文節最長一致法と呼ぶ分かち書きアルゴリズムを提案し、同時に辞書中に存在しない未登録語の出現に対処する方法として、高頻度の付属語による分かち書きを用いることによって、実際のべた書き文から良好な分かち書き結果が得られることを示した。

日本語では文節を構成する単語間に形態的(文法的)接続の規則性があり、この規則性が正則文法でほぼ表現できることから、この特徴を利用し、文節と考えられる文字列(文節形と呼ぶ)をべた書き文から抽出する。二文節最長一致法は、文字列中から連続する二文節形を全て取り出し、それらの長さを分かち書きの尺度として、最長の二文節形としての解釈を与える区切りを二文節間の境界と決定する方法である。

文中での体言と用言の意味的用法が格関係によって表現され得ることから、数千語にわたって用言の格構造とその格に立ち得る体言の意味的範ちゅうを整理し、同時に複合語、派生語の情報を記載し

た用法辞書の形式化を図った。この用法辞書を利用して、分かち書きされた文節単位の文字列中に存在する同音異義語を選択する具体的方法を与え、べた書き文からの自動仮名漢字変換システムを実現した。評価のための実験では、任意に選んだ214文（2592文節）の96.2%の文節が正しく変換されることが示された。

論文の審査結果の要旨

本論文は日本語情報処理システムの隘路とされている入力方法の容易化を目標とする仮名漢字変換システムに関するものである。入力文として著者は最も一般性がありかつ入力打鍵における操作性のすぐれたべた書き仮名文を対象とし、これを文節に分ち書きして漢字仮名混り文に変換するアルゴリズムを開発した。文節分ち書きにおいては2文節最長一致法、付属語による判断等、また同音異字の選択に際しては分類語彙表のコードによる係り受けの無矛盾性の判断等を導入し、任意に選んだ214文総文節数2592の実験において正しく変換された文節96.2%という結果を得ている。昨今わが国の関連業界において仮名漢字変換システムに対する関心が急激に高まっているが、この風潮にさきがけて研究に着手し、最も一般性ある形式においてかなりの成功を収めたものとして本論文の工学上の貢献は大きく、博士論文に値すると認める。